

令和 2 年 5 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16938

研究課題名(和文)19世紀前半の千島アイヌのロシア化

研究課題名(英文)The russianization of the Kuril Ainu in the first half of the 19th century

研究代表者

鈴木 建治 (SUZUKI, KENJI)

北海道大学・文学研究院・共同研究員

研究者番号：00580929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀前半に現れた千島アイヌの物質文化のロシア化は、それ以前の18世紀後半から本格化したロシア帝国の千島列島への進出が大きく影響している可能性が想定された。特に、ロシア連邦モスクワ市のロシア国立古文書資料館所蔵の1775-1780年「クリル列島」遠征関連資料の分析により、毛皮税徴収による千島アイヌのロシア帝国の臣民化が19世紀前半にみられる物質文化のロシア化へつながっていく可能性が考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、18世紀後半から19世紀前半にかけて千島アイヌがロシア帝国に取り込まれていく過程において、千島アイヌがどのように自身が持つ文化的背景を変化させていったのかに注目でき、従来の日露関係史から脱却した新しい千島アイヌ史の構築に近づけた点にある。社会的意義としては、アイヌ研究においてロシア側の一次資料や研究成果を積極的に利用した研究が少ないため、本研究はその数少ないモデルケースとなり、アイヌ文化の多様性を理解する上での新たな研究視点を提供するものとなった。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed the possibility that the material culture of the Kuril Ainu in the first half of the 19th century was greatly influenced by the advance of the Russian Empire to the Kuril Islands in the latter half of the 18th century. In particular I analyzed documents in Russian State Archive of Old Acts(RGADA) and consider that the historical fact that the Russian Empire took Yasak(fur tribute) from the Kuril Ainu and made them subjects would lead to the russianization of the material culture of the Kuril Ainu in the first half of the 19th century.

研究分野：北方史

キーワード：千島アイヌ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

アイヌ研究における千島アイヌの研究分野は、北海道アイヌや樺太アイヌの研究分野と比べると、その進捗度は著しく低い。その決定的な原因は、戦後まもなくして千島アイヌ文化の担い手が消滅してしまい、その伝統が完全に途絶えてしまったことにある。それでも、千島アイヌ研究は、主に日本史学分野において千島列島をめぐる日露関係史の中で脈々と続けられてきた。そこでは、18世紀から19世紀にかけての日露の国家勢力による千島探検・経営や領土問題の中で「翻弄された先住民」として語られ、1875年の樺太・千島交換条約締結後の色丹島への強制移住では、急激な環境変化になじめずついには民族自体が消滅していったという「憐れな物語」として描かれていることが多かった。このような千島アイヌに対する認識・理解は、ロシア側の北方史研究においても少なからず影響を与えている。千島アイヌの研究を取り巻く画一化されたこの状況を払拭すべく、近年、日露の関連研究分野から新たな試みが始まった。

近年の研究動向においても実践されているように、文化伝統の担い手を失ってしまった千島アイヌ研究の現在において最も重要なのは、「国内外で埋もれている」千島アイヌ関連の「新規学術資料の発見」や「既存学術資料の再検討」の徹底化であると断言できる。本研究では、千島列島という特殊地域で得られたすべての学術資料はその存在自体が貴重であるという大前提に立ち、日露所蔵の学術資料の価値を最大限に利用して「新しい千島アイヌ史」の構築を目指す。

### 2. 研究の目的

新しい千島アイヌ史の構築を目指すべく、本研究期間内において、19世紀前半の急速した千島アイヌの「ロシア化」を解明する。本研究では、千島アイヌの「ロシア化」の歴史的経緯に焦点を当てることで、千島アイヌ史における知られざる一面を明らかにする。千島アイヌ文化における「ロシア的要素」の存在についてはアイヌ研究において周知の事実ではある。しかし、それがどのような経緯を経て獲得された文化的要素で、そして千島アイヌ文化内でどのような位置を占めているのかについては全くといって良いほど検討されてこなかった。この点に注目し、下記の2点を解明する。

- ・千島アイヌが受け入れたロシア的要素を示す物質文化や歴史的事象。
- ・ロシア的要素により引き起こされた千島アイヌの文化変容。

### 3. 研究の方法

#### (1) 千島列島出土のロシア製品および千島アイヌ関連資料の形態的特徴の検討。

日露所蔵の千島列島で発見されたロシア製品の考古学資料は、素材別に、カップ・皿・ティーポットなどの陶器製品、瓶・ビーズなどのガラス製品、食器類・道具類・武器類・儀式用品(十字架)などの金属製品、靴などの革製品、衣服などの布製品、パイプやガン・フリントなどの石製品が検出されている。千島列島出土のロシア製品を千島アイヌ側とロシア人移住者側とに区別し比較検討する。また、18世紀後半から19世紀前半における千島アイヌ関係資料(考古学資料・民具資料)も調査することで、千島アイヌのロシア化へ至る過程を明らかにする。

#### (2) 千島アイヌ関連の新規文献資料の解読・翻訳作業。

本研究における「新規文献資料」とは、論文・書籍等においてその存在は触れられたことはあるが詳細については誰も調査したことがない資料を想定している。このような文献資料は、千島アイヌ関連史料において少なからず存在している。本研究期間内では、モスクワとサンクト・ペテルブルグにある古文書・公文書館や図書館を中心に一次文献資料を調査し解読・翻訳を実施する。ロシア側研究者がその重要性を見出すことが難しかった資料を丁寧に読み込むことで、千島アイヌの新たな歴史文化を掘り起こす。

### 4. 研究成果

#### (1) 物質文化研究の成果

##### 千島列島出土のロシア製品(十字架)の検討。

ヨーロッパ・ロシアおよびシベリア地域の十字架の形態的特徴について検討を加えた。イルクーツク大学のドミトリー・ロホフ研究員からシベリア地域のロシア人移住者の物質文化(十字架)に関する2000年代の最新の発掘調査成果とその分析結果の情報を入手し、サンクト・ペテルブルグ市人類学民族学博物館のアンドレイ・ソコロフ上級研究員からはヨーロッパ・ロシアにおける十字架の形態的特徴のスタンダードな研究成果の情報を入手した。これらの情報をもとに、千島列島出土の十字架の型式の分析方法を検討した。

##### ロシア連邦サンクト・ペテルブルグ市人類学民族学博物館(クンストカーメラ)所蔵の19世紀前半以前の千島アイヌ民具資料の調査。

18世紀後半まで遡る可能性のある資料を含む、19世紀前半以前の千島アイヌ民具資料9点を調査した。資料は、衣服3点、舟模型3点、小刀の鞘3点となる。調査した資料の中で、最古級に属する衣服については、その入手経緯や年代に関する文献が存在する可能性があることを、所蔵館のアンドレイ・ソコロフ上級研究員から情報提供を受けた。日本国内で知られている千島アイヌ民具資料(鳥居龍蔵収集資料など)より古い資料となるクンストカーメラ資料を詳細に検討することで、19世紀後半以降に属する国内資料とそれ以前(露米会社の千島進出時期)の海外資料にみられる差異性あるいは類似性が見えてくると想定した。

北千島出土の内耳土器の炭素・窒素安定同位体分析による古食性復元作業。

旧アイヌ民族博物館所蔵の占守島出土の内耳土器1点について、炭素・窒素安定同位体分析による古食性復元作業を実施した。海産物中心の食生活が知られている千島アイヌではあるが、その実態について、日常的に使用している煮炊き具である内耳土器を対象とし調査を行った。今回の調査結果では、想定通り、海産物由来が強いことがわかった。今後継続的に分析することで、文献史料等で記載されている情報とあわせて、その傾向性が科学的につかめると期待する。

アイヌ文化の北方地域への拡散時期の検討。

いわゆる「アイヌ文化の成立」の問題に関連し、サハリン島や千島列島の北方地域へのアイヌ文化の拡散時期が議論されている。北方地域の拡散の年代的問題を扱う上で、「内耳土器」の検討は必須である。本年度の研究では、東京国立博物館所蔵のサハリン島出土の内耳土器2点を年代測定した。その結果、13世紀代と13世紀末～14世紀末であった。サハリン島の年代値は、千島列島へのアイヌ文化進出を推定するための重要な示準となることが想定される。

## (2) 文献資料研究の成果

1775-1780年の「クリル列島」遠征に関する文書調査。

ロシア連邦モスクワ市のロシア国立古文書館所蔵資料について調査した。資料番号 .7, .2, .2539「千島列島、チュクチ民族や主にカムチャッカ等について(1779,1785)」に収められている1775-1780年の「クリル列島」遠征に関する文書を2回(平成29年度、令和元年度)実見調査した。その中でも「新たにヤサーク税を徴収したクリル列島の住民数とその集めたヤサーク税に関する一覧表」、「アトキス島、択捉島におけるヤサーク税に関する一覧表」、「1778年作成のヤサーク税に関する一覧表の写し」、「シャバーリンの航海日誌」、「アンチーピンの遠征日誌」に注目し、1778年と1779年の千島列島における、ロシア帝国による「クリル人」(アイヌ民族)への毛皮税徴収やロシア臣民化について検討した。18世紀後半に築かれた千島アイヌと北海道アイヌを分けたロシア帝国による外的要因が、後の19世紀前半にみられる千島アイヌにおける物質文化のロシア化につながる可能性について考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木建治	4. 巻 97
2. 論文標題 千島アイヌの犬構	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 物質文化	6. 最初と最後の頁 93-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木建治・谷本晃久
2. 発表標題 東洋古籍文献研究所(10M)所蔵和書からみるコレクション形成史
3. 学会等名 日露国際研究集会コレクション形成史からみる日露関係史( ) 北の東西交流
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷本晃久 鈴木建治
2. 発表標題 北からの日本情報:ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所近世・近代日本語関係史料のコレクション形成史
3. 学会等名 北フォーラム2017年 12月例会(第26回)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木 建治
2. 発表標題 在サンクトペテルブルグのA.V.グリゴリエフ・コレクションについて
3. 学会等名 日露国際研究集会 コレクション形成史からみる日露関係史
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木建治
2. 発表標題 樺太出土の内耳土器の年代について
3. 学会等名 2019年度北海道考古学会第1回月例研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----